

同志社大学
2016 年度 卒業論文

論題：家族システムが子どもの自己評価に与える影響

社会学部社会学科
学籍番号：19131075
氏名：山岡 奈津美
指導教員：立木 茂雄
(本文の総字数：20294 字)

要旨

論題：家族システムが子どもの自己評価に与える影響

学籍番号 19131075

山岡奈津美

人間関係からストレスを抱える人々がメディアで取り上げられている。精神的に問題を抱える原因として、生まれ育った家族の環境が関係してくることに興味を持った。先行研究では、家族制度の変遷、家族システムを計量するための尺度として、きずな・かじとりという概念が使われていること、きずな・かじとりの程度が中庸(中間)にあることで家族システムの維持が可能であること、親や家族が子どものパーソナリティ形成や価値観に影響を与えていることなどが分かった。

そこで、「家族のきずなやかじとり」が「父親・母親のコミュニケーション」を通して子どもの自己評価に影響を与えるのかについて調査を行った。同志社大学の学生を対象に調査票による調査を行い、父親とのコミュニケーションの有無が子どもの自尊心に影響を与えることを明らかにした。

キーワード：家族システム コミュニケーション 子どもの自己評価

目次

はじめに.....	1
1 章 先行研究.....	2
1.1 家族制度の変遷.....	2
(1)直系家族.....	2
(2)核家族.....	2
(3)合意制家族.....	3
1.2 家族システムの研究.....	3
(1)家族システムとは.....	3
(2)家族の構造.....	4
(3)家族の情緒的結合.....	4
(4) 家族システムの計量的研究における方法論上の前提.....	5
1.3 家族が及ぼす子どもへの影響.....	6
(1)パーソナリティ形成.....	6
(2)価値観.....	7
1.4 仮説.....	7
2 章 研究方法.....	8
2.1 調査の概要・対象.....	8
2.2 尺度、調査項目.....	8
2.3 分析方法.....	9
(1)きずな・かじとり尺度.....	9
(2)コミュニケーション時間.....	9
(3)自己評価.....	9
3 章 調査結果.....	10
3.1 回答者の属性.....	10
3.2 記述統計.....	10
(1)父・母とのコミュニケーション時間.....	10
(2)きずな・かじとり.....	11
(3)自分に対する評価.....	13
3.3 きずな・かじとりとコミュニケーション量の関連性.....	14
3.4 一元配置分析.....	16
(1)父親・母親とのコミュニケーションの有無と自己評価.....	16
(2)きずな・かじとりと自己評価.....	21
4 章 考察.....	25
4.1 記述統計に関する考察.....	25
4.2 分析の考察.....	25
おわりに.....	27

はじめに

わたしの友人が「社交不安障害」という病気を発症した。そのことをきっかけに「社交不安障害」について調べてみると、「社交不安障害」とは大勢の前で話したり、初対面の人と話すとき強い緊張感や恐怖感に襲われ、社会生活や仕事に支障をきたし、ひどい場合には動機や手足の震えなどを引き起こす病気である。日本における患者数は100万人を超えるとも言われる病気であり、特別珍しい病気ではないようだ。この病気の症状を見ると、程度の差はあるが、多くの人が経験したことがあるのではないか。症状の原因の1つとして、小さい頃の経験や育った環境にあるようだ。実際、わたしの友人は病院で家族個人の性格、家族が自分に向ける態度、小さい頃の家庭環境、これまでにトラウマとなった経験などについて深く聞かれたそうだ。一見、精神的な問題であるが、多くの人が経験する人間関係の不安や問題を、家族という視点から捉えている社会学的な視点に興味を持った。その友人がわたしの前ではそういった様子は見せなかったように、周りの人が気づかないが、悩みを抱えている人が多くいる可能性もある。また、現在、テレビや雑誌などで、人間関係からストレスを抱える人について頻繁に取り上げられている。これらから、家族とそこで育つ子どもの問題は、病気を抱えている人だけの問題でなく、社会的に研究される必要があるのかもしれない。

社会生活は、人々が多くの集団に属し、その中で他人と関わり合いながら行われる。その集団には、学校や職場、趣味など、人によってさまざまである。その中でも、家族という集団は、自らの意志で選択した家族に所属、あるいは脱することが難しい。しかし、家族は、日々の生活の中でともに暮らし、時には家族メンバーに起きた問題に対して、一緒に解決しようとする。また、1人では生きていくために必要な食べ物を摂取したり環境に適応することはできない子どもにとっては、周りの保護や援助を必要とし、子どもが安心して成長できる環境を作ることができる家族は重要となる。さらに、子どもが成長する上で必要な社会化も家族の役割となる。

森岡らは、社会化についてこう述べる。

「動物として生まれた人間の子どもが、彼の属する社会の行動様式、生活習慣を学習し、その社会の正規の成員にしたてあげられる過程が、社会化(socialization)と呼ばれる」とする(2007)

森岡らは続けてこう述べる。

社会化は、個人が所属するさまざまな集団、すなわち、家族、近隣、遊び仲間、学校、職場などにおける人間関係を通じて、社会の成員として生きるための知識や技術、規範などの社会的価値を自己の内部に取り入れていく過程である。その意味では、社会化の過程は人間の一生を通じて展開されるといってもよい。そのなかで、人間が最初に所属する集団である家族における社会化は、最も基礎的なものであり、人格形成上、重要な意味をもっている。

家族は、子どもは最初に属する集団が家族であり、最も影響力の大きい集団の1つであると言える。よって、子どものパーソナリティ形成、あるいは子どもが成長し社会で生きていくためや対人関係のスキルを身につける点において、家族がどうあるかは、重要な問題となるであろう。このように子どもにとって家族は大きな意味をもち、社会で生きていくために必要な知識、習慣を取り入れていく。

子どもの成長の上で重要となる家族であるが、現在、女性の社会進出、未婚者数の増加、出生率の低下など、ライフスタイルの多様化により、家族のあり方は大きく変化している。父と母、子どもから成り立つ核家族という家族のあり方も当たり前ではない。2010年の国勢調査において、一般世帯の家族類型別の世帯数と割合をみると、それまで最も大きな割合を占めていた「夫婦と子供から成る世帯」が減少し、「単独世帯」は32.4%と最も大きくなっている。片岡によると、今日では、合意制家族モデルが家族らしさとして浸透しているとする(2015)。

そこで、現在家族のあり方が変化しているとする、多様化した家族の中で育つ子どもが現在の対人関係や自己をどのように評価しているのだろうかと考えた。また、健康的な家族の中で育てられた子どもが、実際に自己に対してどのような考えを持っているのかと考える。ライフスタイルの多様化がこれからも進み、家族のあり方もさらに変化していくとすると、家族独自のきまりや役割の決定のためには、コミュニケーションは欠かせない。このような理由から、家族のあり方とその子どもに関する研究は、意義があると言えるのではないか。以上を踏まえ、1章ではこれまでの家族や子どもの社会化に関する研究をまとめる。2章においては、本研究のために同志社大学の学生に行った調査の方法、その分析方法についてまとめる。3章では、調査結果をSPSSで分析し、それをまとめ、4章では考察を行う。

1 章先行研究

1.1 家族制度の変遷

(1)直系家族

明治期以降、日本の家族は絶えず変化しつづけてきた(野々山、2007)。明治時代になると「直系制家族」が定着した。「直系制家族」とは、家父長制家族のことで、家長が権限を握り、他の家族成員をまとめる家族である。ここでは、親族関係という概念の存在が重要となる。かつての日本は、農業中心の社会であり、生産性も低い社会であったため、経験的な知識や技術を伝授したり、お互いに助け合うことが不可欠であった。さらに長子相続制による土地所有の格差も加わり、支配関係が存在した。また、「家」を守るという意識が強く、家系を絶やさないことが重要とされていた。これらから、親族関係は権力的な構造を持っていた。

(2)核家族

工業化によって、労働力の集約化や生産性の向上など、経済の構造が変化し、個人の能力や努力が評価尺度となった。工業化は、人々の行動面においても変化をもたらした。職業選択の自由や居住選択の自由、財産処理の自由、配偶者選択の自由である。これらの変化は直系制家族の維持に影響を与え、第二次世界大戦の後、大きな家族形態の変動が生じた。「核

家族」化である。核家族は夫婦関係が中心となり、主体的に選択が可能な家族であると言える。核家族は、夫(父親)が稼ぎ手となり、妻(母親)が家の家事などを行うという分業的なスタイルを前提としている。直系制家族の場合、家族の外的要因による危機に面した際、親族集団で助け合うことが可能あったが、核家族の場合、家族の私的領域の確立によって危機に面した場合には、その家族のみで対処しなければならず、傷つきやすいという側面を持っていた。また、工業化が進むにつれ、共働きの増加による家族内での時間の減少や、個人平等主義によって、家族の規範やきずなは弱まっていくこととなる。しかし、性別役割分業は存在し続けた。

(3)合意制家族

やがて工業化が終わり、成熟社会に突入すると、生活の質や精神面の向上を目指すようになり、第三次産業が発達する。医療、教育、福祉、などのサービス業の発展がみられ、これらには女性の就業も必要とされた。さらに、女性の高学歴化によってキャリア形成が増加し、婚姻の時期も個人によって差が大きくなるなど、ライフスタイルの多様化が進んだ。このようなライフスタイルの多様化は、家族形態にも変化を及ぼし、個人が自ら選択し、生活する「合意制家族」が形成された。妻(母親)の就労が増加し、経済的な自立性を持ち、妻が家事や育児をするという役割分業からの解放が起こったと言える。夫婦制家族と異なる点の一つがこの性別役割分業の解放である。野々山によると、夫婦制家族は、「男性は、夫(父)としての社会規範が独立変数として作用し、それにしたがって夫婦関係の結晶化に向かって、夫婦過程(役割過程)は展開していく。このことは男性に対する夫(父)としての役割期待や女性に対する妻(母)としての役割期待が規範によって形成されているということである」とする。一方、合意制家族では、「家族生活に関わる規範や資源や情報などが独立変数として存在し、それが家族形成の過程において家族成員の個人的な生活選好から解釈し直されて、他の家族成員との相互作用やコミュニケーションをとおしての交渉(ときに駆け引きや強要なども含まれる)のうちに、その家族固有の生活選好として家族のライフスタイルが合意形成されていくもの」とする(2007)。

これらから、父親や母親としての役割を明確に区別するのではなく、家族(夫婦)の合意に基づく役割の遂行が行われているのだ。また、野々山によると、家族成員の個別の生活選好にもとづいて家族ライフスタイル(すなわち、家族形態、分業形態、就業形態、居住形態など)が集団選択される場合、成員たちの個人的選好は、ときに集団選択である家族生活とは齟齬をきたす場合もある(2007)。これらから、合意制家族モデルは常に家族との相互作用を必要とし、お互いのことを思いやって生活することや、他人の選好を理解するなどの努力が必要である。

1.2 家族システムの研究

(1)家族システムとは

そもそも家族の定義は何であるか。社会学小辞典によると、家族とは、「夫婦関係を基礎にして、そこから親子関係や兄弟姉妹の関係を派生させるかたちで成立してくる親族関係の小集団」とし、「そればかりでなく、家族は人間社会の基本的単位であり、また人間形成(パーソナリティ形成)、したがって社会化の基礎的条件を提供する最も重要な社会集団である。」とする(2005)。また、中釜らによると、家族は周囲の環境から情報を得たり、物を

取り入れたり排出したりする点で開かれたシステム(システム)である(2008)。

この意味ある要素の集合体であるシステム(上位システム)内において、何らかの特徴に焦点を当てると、さらに小さな単位(下位システム)に分けることが可能となる。このような分割を経て構築された階層的なシステムは、下位システムが上位システムに従属する形で機能する。中釜らによると家族システムとは、ある出来事が多方向に影響を与えたり、出来事同士が相互に影響し合って、どちらも原因でもあれば結果にもなるといった込み入った因果関係である円循環的因果律(または循環的因果律)であるとする(2008)。

(2)家族の構造

家族システムは、いくつかのサブシステムによって成り立っている。あるサブシステムが日常生活の決まり事から家族の重要な決定事項にまでも機能する。もし、ある決定サブシステムが強力で、他のサブシステムがうまく機能しないとき、家族の成員が問題を抱えてしまうということになる。

また、中釜らによると、サブシステム同士を区切るための境界があり、それは3つに分類される。1つ目は「明瞭な境界」で、システムの情報がオープンで、ほどよくクローズされ守られている状態のことを指し、健康的な境界をいう。2つ目は「あいまいな境界」で、問題解決にあたり、だれがどのような役割機能を取るかが不明確で、お互いがお互いを巻き込み、混乱状態になりやすい。3つ目が「固い境界」で、家族がバラバラで、情報共有されることがなく、相互支持がない状態となる。日本では「あいまいな境界」を持つ家族が多いとされている。

(3)家族の情緒的結合

森岡・望月によると、本節の(1)で述べたように家族が人間の単なる集合体でない要素として、同じ集団に属している気持ち、すなわち感情(we-feeling)であるとする(森岡・望月 2007)。家族は家族に所属することそれ自体に意味のある集団であり、あらゆる集団の中でもとくに情緒性の強い集団である。

森岡らは家族のつながりについて次のように述べる。

家族成員は相互に強い愛着心をもって結びつき、相手に親しみをもち、信頼しあっている。お互いに心の隔てもなく、強い一体感につつまれている。(森岡・望月 2007)

森岡・望月は続けてこう述べる

しかし、家族が情緒性の強い集団であるということは、常に相互肯定的な一体感で包まれていることを意味するのではない。情緒には愛着だけでなく反発もある。したがって、ひとたび、感情のゆきちがいが生じると、すさまじい葛藤状態が生まれる。それは、他の集団のように、加入・脱退が自由にできないだけに、どこにも抜け道を見いだすことができない、やりきれないものとなる(森岡・望月 2007)

家族の情緒関係が異常に強まると家族の役割や権力の安定に悪影響を与え、危機的状況に陥る可能性もあるということだ。一方で、お互いが無関心であれば情緒関係が弱く、形式的な家族関係のみが維持されると、相互の情緒的交流がないあまり、危機的状況に陥ってしまう。情緒関係において、極端な関係は、家族に何らかの悪影響を及ぼしかねない。情緒関係において日本の家族は、はずかしい、はしたないとといった考えから、家族に対する直接的な情緒表現は欧米に比べ乏しいが、家族の情緒関係自体は、愛着傾向が強とされている。

(4) 家族システムの計量的研究における方法論上の前提

家族システムの機能の程度を測るために、デイビッド・H・オルソン(David H. Olson)らが提唱したものが円環モデル(Circumplex Model of Marital and Family Systems)である。彼らは、家族の機能度がきずな(cohesion)と、かじとり(adaptability)によって決定されるとし、その際、きずな・かじとりと家族システムの機能度とは、カーブリーニアな関係にあると想定する。つまり、きずな・かじとりとも中庸でバランスのとれた状態にある時に家族システムの機能は最適となり、一方、そこから外れて極端に高いか、あるいは極端に低い方向に逸脱すると機能不全になる(立木、1999)。立木はこの円環モデルを用いて、抽象的な概念を量的に評価するために尺度の開発を行った。以下、その研究の変遷をまとめる。

立木は、まず円環モデルの訳語を行った。きずな水準が極端に高い場合を示す enmeshment を「ベッタリ」、きずなが中庸であるがある程度の高さを持つ場合を指す connected を「ピッタリ」、きずなが中庸であるがある程度低い場合を指す separated を「サラリ」、きずなが極端に低い場合を指す disengagement には「バラバラ」という訳語をあてている(立木、1999)。きずなのバランスのとれた家族(ピッタリ・サラリ)において、家族システムが最もうまく機能し、個人の成長を促すのだ。また、常にきずなが中庸にあるとは限らず、状況的ストレスや発達の变化に応じて、どのような関係もとりうる。一方できずなが極端な家族(ベッタリ・バラバラ)においては、極端な関係が固定されているため、問題が発生しやすい状態にある。

かじとりについては、それが極端に高い場合を指す chaotic には「てんやわんや」を、かじとりが中庸ではあるがある程度高い flexible には「柔軟」を、かじとりが中庸ではあるが、どちらかというやや固めを指す structured には「キッチリ」と、かじとりが極端に固い場合を指す rigid には「融通なし」という訳語をあてた(立木、1999)。かじとりとは状況の変化や成員間の変化・成長に応じて夫婦・家族システムを柔軟に変化させる能力のことである。この概念の根底にあるのは、形態維持(morphostasis)と形態変容(morphogenesis)という概念であり、これはシステムのフィードバックと密接に関連している(立木、1999)。フィードバックとは、システムに逸脱や誤差が生じたとき、その情報に基づいてシステムを再制御するメカニズムであり、負のフィードバックと正のフィードバックの2種類がある。負のフィードバックはシステムの形態維持に重要となり、逸脱や誤差を発見すると、それを極力少なくし、逸脱に対抗してシステムを保守するような(逸脱対抗)制御をする。正のフィードバックは形態変容であり、逸脱や誤差を発見すると、それを奨励し、逸脱をより増幅させるように働く。つまりかじとりは、状況に応じて家族内のリーダーシップや役割、しつけ、問題解決のスタイルなどを柔軟に変化させる能力である。そして、家族システムが環境の変化に柔軟に対応できるためには、正負両方のフィードバックが状況に応じて適切に切り替えられる必要があるのだ。かじとりが中庸な家族は、成員がコミュニケーションによっ

て意見を言うことが可能で、役割の共有やきまりが明確に示されている。家族システムにおいて、好ましいとされる状態は中庸な家族(キッチリ・柔軟)である。一方でかじとりが極端な家族(てんやわんや・融通なし)においては、これらのいずれかが極端な状態にある。

立木研究室は、円環モデルの概念を調査するためにオルソンがすでに開発していた FACES シリーズを、より大規模なサンプルでの調査を可能にする尺度の開発を始めた。また、FACES シリーズを研究していく中で、翻訳版 FACES において、どの程度忠実に訳されているか不明なことや、アメリカにおける文化や社会と、日本におけるそれは異なることから独自の家族システム評価尺度を開発することとなった。それが FACESKG である。家族臨床における実務で使用できるようにするため、家族成員間の一致度を高めること、また円環モデルの概念に適合させるため、きずな・かじとりと家族の機能度とのカーブリーな関係を示すことなど改良を重ねた。立木研究室が研究を重ね、独自に項目を作成し、尺度を作成する際には実証的な調査を行い、結果として臨床や家族調査の実務に耐えることのできる FACESKGIV を完成させた。その結果、阪神淡路大震災の被災者を対象に行った調査において、FACESKGIV-16 はきずな・かじとりと家族機能度との間にカーブリーな関係確認することができた。

1.3 家族が及ぼす子どもへの影響

(1) パーソナリティ形成

家族に関する研究についてこれまで見てきたが、本節では、具体的にどのような面において影響を及ぼすのかについて行われた研究について見ていく。かつて母親と父親は、子どもの子育てにおいてそれぞれに役割を持っていた。母親は子どもと父親の媒介者であり、子どもが息子の場合、父親の子どもに対する見方や父親の価値観、規範意識を肯定的に伝達する役割を持ち、娘の場合には、父親と娘の差異を調整する役割を持っていた。父親は子どもの社会参加を促したり、家族をまとめたり、子どもの道徳性の発達で重要な役割がある。また、パーソナリティ形成には、家族の役割が大きく関わっているとされており、Persons らによると、相反する 2 つの比較(道具—表出的役割など)の両極の特質をはっきりつかむことで役割の取得がなされ、客体の内在化が起こり、パーソナリティの形成、分化が起こると分かっていた(1956)。

また、子どものパーソナリティ形成においては父親のほうが影響力を持つとされ、父親の性格や思考が子どもに影響を与えることも分かっている。D. B. リンによると、ある実験において、不適応、脅威的、独断的で、子どもに対して素直な関心に欠けている父親は、子どもの病的症状を引き起こしやすいことが分かっている。行動異常児をもつ父親は、引っ込み思案であり、強制的な態度で子どもに接することない。積極的に自分勝手、そして脅威的な母親に子育てのすべてを任せるという結果となった。神経症児をもつ父親の場合、心配性であらゆる問題に苦しめられている不安な人で、ストレスを先延ばしにしたり理屈をつけて行動しなかったりする。また、打たれ弱く、柔軟性に欠け、抑圧的で、生きる喜びを持っておらず、妻の尻にしかれているという結果となった。父親の特徴や行動は、子育てに大きく影響しているといえる。

さらに、パーソナリティ形成について家族という変数から分析した研究では、次のようなことが分かっている。パーソナリティ形成要因について久米らは、2013 年の「若年層の生活と家計に関する調査」から、子どもの頃の家庭での過ごし方は、パーソナリティの有力な

形成要因であることを明らかにした。とくに家事手伝いは、すべての特性因子(外向性・協調性・勤勉性・非神経症傾向・開放性)を促進させている。子どもの社会化においてよく使われていた理論として、権威主義的パーソナリティが挙げられる。権威主義的パーソナリティとは、母親と父親の関係が子どもに間接的に影響を与えるということも分かっている。夫婦間での価値観の一致や役割分担、協応がなされている場合、母親は父親と子どもに積極的な態度を取ることが分かっている。また、育児における夫から妻へのサポートの認識が夫婦ともに低い夫だけ高い場合、好ましい夫婦関係でなく、逆に妻だけ高い場合、良好といえる(尾形、2011)。このことから、夫婦関係においても子どものパーソナリティに影響を及ぼす。

(2)価値観

家族の中での経験と職業的価値観の関係を分析した研究(2013)において、山本は家族との友好的な経験は社会的信頼志向を強めるとする。また、親に遊んでもらったり食事をともにしたりする経験が多いほど、信頼される仕事を求めるようになるのである。一方、疎外的な経験は社会的信頼志向や他者志向を弱め、高い地位に就くことを求める傾向がある。すなわち家族から疎外された経験が多いほど、信頼されることや他者を重要だと思わなくなり、その分人の上に立つことを重視するようになるのであるとする(山本、2013)。

また、子どもの職業観と父親の影響に関する研究では、大学3年生とその父親へのヒアリング調査から①子どもが積極的な職業観を形成するためには、親子間の会話が重要である②家で仕事の話をする親は、子どものなりたい職業を知っていることが多く、その子どもは無気力な職業観(職についても得られるものは何もない)が低く、積極的な職業観を持つということが分かっている(矢島・寺田、2009)。

これまでの研究の中で、家族が子どもの社会化や価値観等に影響を与えることについては多くの研究が行われているが、家族成員間の関係や役割の違いが子ども自身の自己認識に与える影響についての研究は見当たらない。子どもへの家族の影響は、単に父親、母親について個別に分析するだけでなく、家族の相互作用から生まれる子どもへの影響について分析することが重要であると考え。そこで、次節では、これらの先行研究を基に、本研究における仮説を立てる。

1.4 仮説

先に述べた家族システムの計量的研究において、かじとりが中庸である家族は、コミュニケーションによって家族の民主制が保たれているということが分かっている。「きずな・かじとりが中庸であれば父親・母親とのコミュニケーションをする人の割合が高まる」という仮説を立てる。きずな・かじとりが中庸であるということは、家族成員間の心理的距離が程よく取られ、家族の決定権がある程度分散しているということになる。このためには、家族間のコミュニケーションが必要である。きずなを形成するためにはもちろん、何か物事を決定するとき、最終判断をする人が決まっていなければ家族で話し合う必要がある。きずなやかじとりの程度によってコミュニケーションの有無が変化すると考える。

さらに、家族が子どもの社会化、パーソナリティ形成を含め子どもの成長に大きく影響を与えることが分かっている。そこで、「父親・母親とのコミュニケーションあれば、子どもの自己評価は高まる」という仮説を立てる。家族の中でも、父親と母親の子どもに与える影

響が大きいことは今までの研究から明らかである。コミュニケーションの時間が増えると、社会化やパーソナリティ形成が順調に行われ、社会から必要とされていると考えたり、自分に対する評価が高まると考える。

仮説

- ① きずな・かじとりが中庸であれば父親・母親と会話をする人の割合が高まる
- ② 父親・母親とのコミュニケーションの時間がある子どもの方が、自己評価は高まる

この仮説をもとに、本研究を進める。

2 章研究方法

2.1 調査の概要・対象

本研究において、同志社大学の災害社会学を受講している学生を対象として、質問紙による調査を行った。講義中に調査票を記入してもらい、その場で回収するという方法をとった。回答者数は111人であった。回答を数値あるいは記述で入力し、統計解析ソフト IBM SPSS Statistics version24 を用いて分析を行った。

2.2 尺度、調査項目

調査票の内容は主に「家族のあり方」「自己の現在についての評価」「父親・母親との休日と平日におけるそれぞれの会話時間」に関して行った。「家族のあり方」については、立木茂雄研究室で開発された、家族システム評価尺度 FACESKGIIV-16 (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale at Kwansai Gakuin) を使用し、家族のきずなとかじとりについて調査した。

表 1 交友関係の自己評価を測る尺度

	あてはまる	どちらかといえはあてはまる	どちらかといえはあてはまらない	あてはまらない
何でも話せる友達がいる	1	2	3	4
友達付き合いが面倒に感じることもある	1	2	3	4
一人での時間は必要だ	1	2	3	4
気の合わない人とも話をすることができる	1	2	3	4
付き合っている異性の友達(彼氏・彼女)がいる	1	2	3	4

表 2 自己評価を測る尺度

	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえはあてはまらない	あてはまらない
私は自分自身に満足している	1	2	3	4
自分には長所があると感じる	1	2	3	4
自分の親から愛されている(大切にされている)と思う	1	2	3	4
ときどき、自分は役に立たないと強く感じることもある	1	2	3	4

表1および2の「自己についての評価」については、内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室が2012年に行った「親と子の生活意識に関する調査」の調査項目を引用した。これは、母子家庭や父子家庭などの家族形態、暮らし向きなどの家庭環境や地縁などの差異は、子どもの将来の見通しや学習に対する意識などに影響を与えているのかを把握し、どの分野に資源を投入するべきかなど、今後の支援手法について考察するための調査である。

2.3 分析方法

(1)きずな・かじとり尺度

また、かじとり尺度については、「融通なし」「きっちり」「柔軟」「てんやわんや」のいずれかが与えられた8つの質問項目のうち、「融通なし」の項目には1、「きっちり」の項目には2、「柔軟」の項目には3、「てんやわんや」の項目には4という数字を割り当て、回答者がどの質問項目を選ぶかによって4つに分類し分析を行った。きずな尺度については、「バラバラ」「サラリ」「ピツタリ」「ベツタリ」のいずれかが与えられた8つの質問項目のうち、「バラバラ」の項目を1、「サラリ」の項目を2、「ピツタリ」の項目を3、「ベツタリ」の項目を4とし、回答者がどの質問項目を選ぶかによって分類し分析を行った。

(2)コミュニケーション時間

コミュニケーション時間のついては、「父親との休日の会話時間」「母親との休日の会話時間」を分析に用いることとした。また、父親と母親どちらも最低値が0分、最高値が300分と幅が大きく、0分の回答が多かったため、回答を得た会話時間を0分については0、1分以上については1とし、会話時間の有無によって分析を行った。

(3)自己評価

交友関係を尋ねる項目については、項目ごとにていねいに分析するためや、友人関係の評価項目が一概でないためそれぞれについて分析を行った。また、「一人でいる時間は必要だ」という項目は、交友関係そのものを尋ねるものではないこと、「付き合っている異性の友達(彼氏・彼女)がいる」という項目については回答の肢が適切でなかったことから分析に加えなかったこととした。交友関係について尋ねる項目のうち、「何でも話せる友達がいる」「気の合

わない人とも話をする事ができる」については、「あてはまる」を4、「どちらかといえばあてはまる」を3、「どちらかといえばあてはまらない」を2、「あてはまらない」を1とし、数字が高いほど交友関係に関する自己評価が高いものとした。

自己評価については因子分析を行った(主因子法・バリマックス回転)。それぞれのバリマックス回転後の寄与率は表3に示してある。そして因子分析の後、得点化し、分析を行った。そして第1因子を「自尊心」、第2因子を「自己肯定感」とした。なお平石の研究(平石、1990)から、本研究における「自尊心」の定義は、自己概念における評価次元(例えば好ましい一好ましくない、望ましい一望ましくない、肯定的一否定的など)を表す総称として、「自己肯定感」はその下位概念として定義する。

表3 自己評価に対する項目の因子分析結果(主因子法・バリマックス回転)

	自己肯定感因子	
	自尊心因子	子
4_1 私は自分自身に満足している	0.757	0.287
4_4 ときどき、自分は役に立たないと強く感じることもある	-0.512	0.009
4_2 自分には長所があると感じる	0.487	0.717
4_3 自分の親から愛されている(大切にされている)と思う	-0.008	0.606
寄与率	26.80	24.10
累積寄与率	26.80	50.91

自己評価の測る項目については、「私は自分自身に満足している」「自分には長所がある」「自分の親から愛されている(大切にされている)と思う」の項目については「あてはまる」を4、「どちらかといえばあてはまる」を3、「どちらかといえばあてはまらない」を2、「あてはまらない」を1とし、数字が高いほど自己評価が高いものとした。

3章 調査結果

3.1 回答者の属性

調査は同志社大学の災害社会学の授業を受講している学生に対して行い、最終的に男性41名、女性67名、無回答3名の計111名から回答を得ることができた。回答者の年齢は、19歳~26歳で、平均は20.1歳であった。回答者の所属学部は、文学部1名、社会学部87名、経済学部3名、商学部11名、政策学部1名、グローバル地域文化学部3名、生活科学部1名、社会学研究科1名、無回答3名であった。

3.2 記述統計

(1)父・母とのコミュニケーション時間

父・母との休日におけるコミュニケーション時間は表4に示すとおりであった。父親と話

す時間よりも、母親と話す時間が多く、平均時間において、父親は 26.4 分であるのに対し、母親は 58.5 分と、2 倍近くの差が見られた。父親・母親ともに最小値、最大値はそれぞれ 0 分、300 分であった。

表 4 父親・母親との会話時間の統計

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
あなたは休日に父親と何分くらい話しますか	0	300	26.4	41.8
あなたは母親と休日に何分くらい話しますか	0	300	58.5	62.9

(2) きずな・かじとり

家族のきずなを測る項目において、各項目を選んだ人の割合は表 5 に示すとおりであった。回答した人のうち、50%の人が「たいがい各自好きなように過ごしているが、たまには家族一緒に過ごすこともある」、26.4%が「休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある」という結果となった。一方で、「家族の間で、用事以外の関係は全くない」「誰かの帰りが遅いときには、その人が帰るまでみんな起きて待っている」という項目を選んだ人の割合は 0.9%と低い結果となった。

表 5 きずなを測る尺度に対する回答

	有効%	水準
たいがい各自好きなように過ごしているが、たまには家族一緒に過ごすこともある	50.0	サラリ
わが家では、子どもが落ち込んでいる時は親も心配するが、あまり聞いたりしない	5.7	サラリ
悩みを家族に相談することがある	9.4	ピッタリ
家族はお互いの体によくふれあう	2.8	ベツタリ
家族の間で、用事以外の関係は全くない	0.9	バラバラ
家族のものは必要最低限のことは話すが、それ以上はあまり会話がな	3.8	バラバラ
休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある	26.4	ピッタリ
誰かの帰りが遅いときには、その人が帰るまでみんな起きて待っている	0.9	ベツタリ

きずな尺度のそれぞれの項目に付与されていた水準に従って、回答者を「バラバラ」「サラリ」「ピッタリ」「ベツタリ」の 4 つに分類すると、図 1 のようになった。「サラリ」が 55.7%

と高く、次に「ピッタリ」が 35.8%という結果となった。きずなにおいては、中庸な家族が多いと言える。

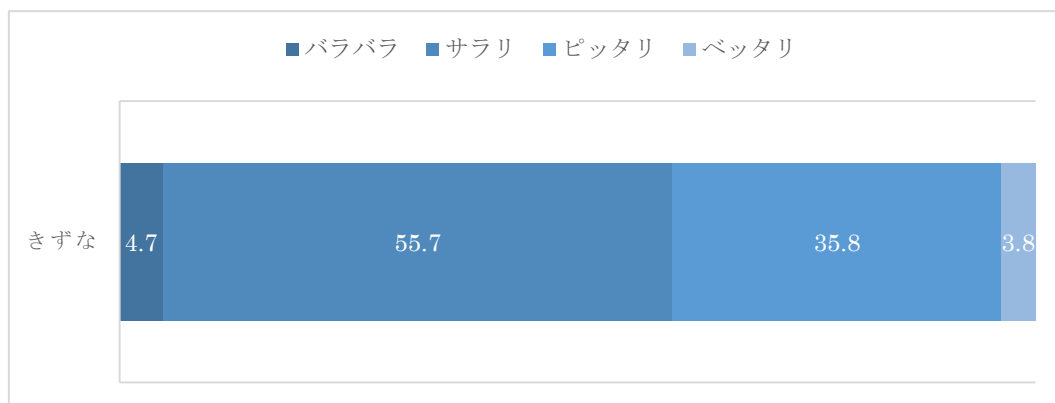


図 1 きずな項目に対する回答

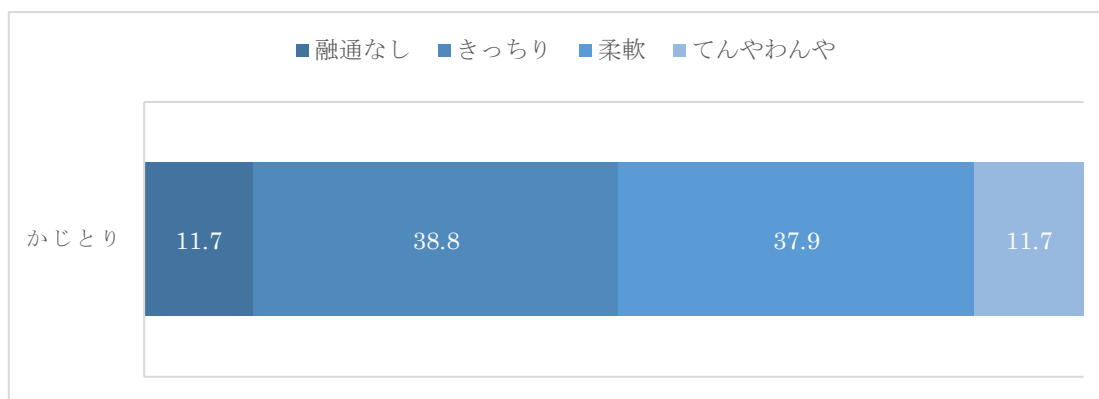
家族のかじとりを測る項目において、各項目を選んだ人の割合は表 6 に示すとおりであった。きずな尺度の結果のように大きく差は表れなかったが、「家でのそれぞれの役割ははっきりしているが、皆でおぎないあうこともある」が 29.1%と最も多く、次に「問題が起こると家族はみんなで話し合い、決まったことはみんなの同意を得たことである」が 20.4%という結果となった。

表 6 かじとりを測る尺度に対する回答

	有効%	水準
問題が起こると家族はみんなで話し合い、決まったことはみんなの同意を得たことである	20.4	柔軟
家でのそれぞれの役割ははっきりしているが、皆でおぎないあうこともある	29.1	きっちり
困ったことが起こったとき、いつも勝手に判断を下す人がいる	5.8	融通なし
わが家ではそれぞれの家での役割を気軽に交代することができる	17.5	柔軟
家の決まりは皆が守るようにしている	9.7	きっちり
わが家はみんなで約束したことでもそれを実行することはほとんどない	4.9	てんやわんや
問題が起こると家族で話し合いがあるが、物事の最終決定はいつも決まった人の意見がとおる	5.8	融通なし
わが家では家族で何か決めても、守られたためしがない	6.8	てんやわんや

かじとり尺度のそれぞれの項目に付与されていた水準に従って、回答者を「融通なし」「きっちり」「柔軟」「てんやわんや」の4つに分類したものが表である。「きっちり」と「柔軟」に分類された人が多く、かじとりにおいても中庸な家族に属する回答者が多いと言える。

図2 かじとり項目に対する回答



(3)自分に対する評価

自身の交友関係についてどう評価するかを尋ねる項目に対する回答結果を図3にまとめる。「気の合わない人とも話をすることができる」において「どちらかといえばあてはまる」がそれぞれ40.9%と高い結果となった。「何でも話せる友人がいる」においては「あてはまる」が64.5%と特に高い結果となった。一方で、「友達付き合いが面倒を感じることもある」において「どちらかといえばあてはまる」と答えた人が42.7%となった。交友関係において、肯定的な評価をする人が多いが、「友達付き合いが面倒を感じることもある」においては「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」が過半数を超える結果となった。

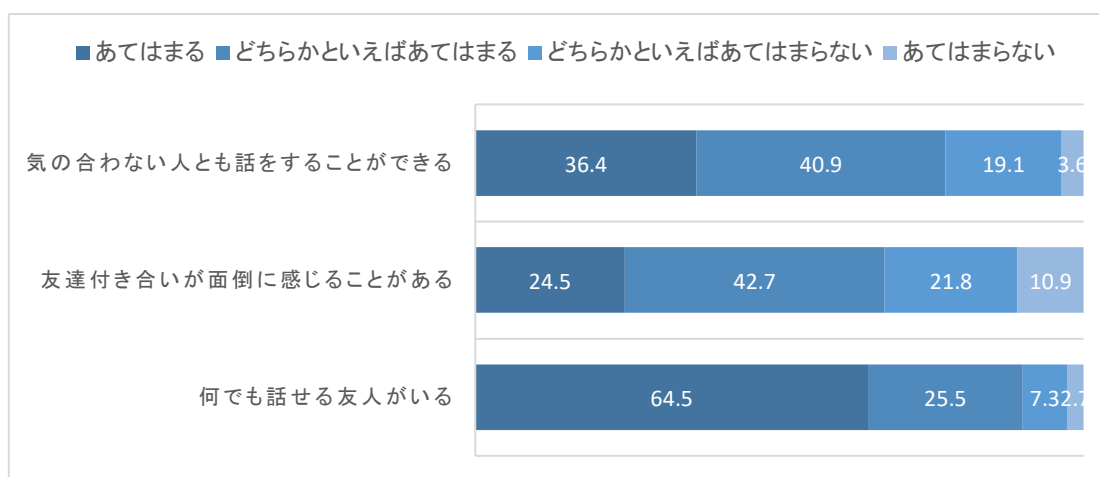


図3 交友関係の自己評価に関する項目に対する回答

自己評価に関する項目に対する回答結果は、図4のとおりであった。「自分の親から愛されている(大切にされている)と思う」に対して「あてはまる」「どちらかといえばあてはま

る」と答えた人は95%を超え、特に高かった。また、「自分には長所があると感じる」「私は自分自身に満足している」においては「どちらかといえばあてはまる」がそれぞれ50.9%、43.6%と高い結果となった。一方、「ときどき、自分は役に立たないと強く感じることもある」に対し「あてはまる」と答えた人は47.3%と高かった。また、「私は自分自身に満足している」において、「あてはまらない」と答えた人は20%となった。現在の自己に対して否定的な評価をする人も少なくはない結果となった。

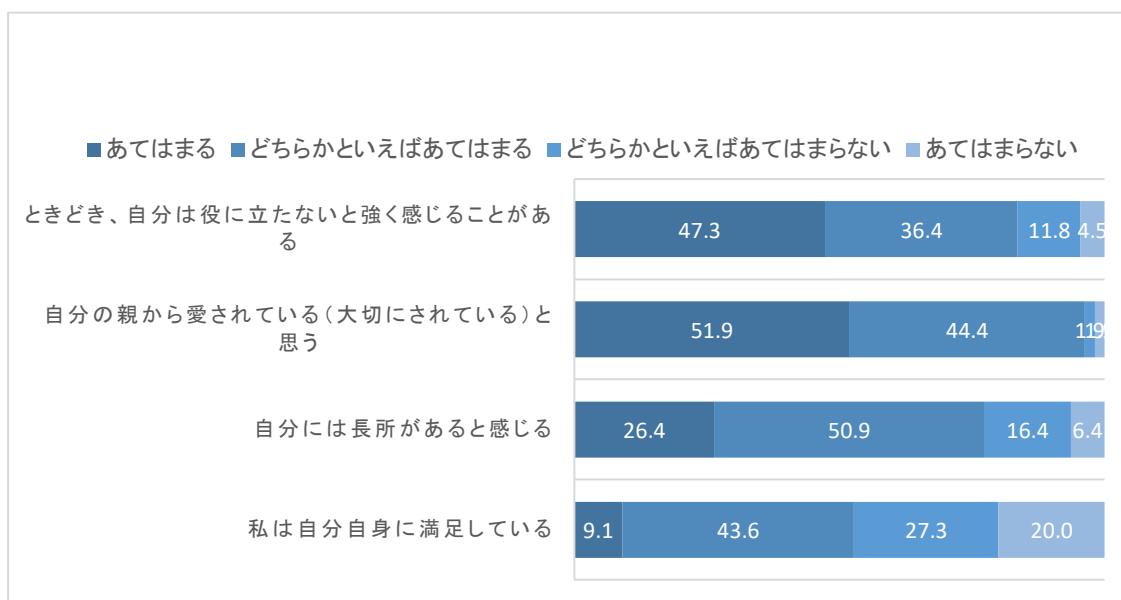


図4 自己評価に関する項目に対する回答

3.3 きずな・かじとりとコミュニケーション量の関連性

きずな・かじとりと父親・母親とのコミュニケーションの有無の関連性を分析するために、クロス表分析を行った。きずな・かじとりを独立変数、父親・母親のコミュニケーション量を従属変数とし、それぞれについて分析を行った結果を表7～10に表す。表から、有意な結果を得ることができなかった。本調査において、きずな・かじとりと父親・母親のコミュニケーション量それぞれの間には関連性はあると言えなかった。

表 7 父親との会話時間の有無とかじとりのクロス表

			父親との休日会話時間		合計
			なし	あり	
かじとり 4 類型	融通なし	度数	4 (33.3%)	8 (66.7%)	12 (100.0%)
	きっちり	度数	11 (27.5%)	29 (72.5%)	40 (100.0%)
	柔軟	度数	9 (23.1%)	30 (76.9%)	39 (100.0%)
	てんやわんや	度数	4 (33.3%)	8 (66.7%)	12 (100.0%)
合計		度数	28 (27.2%)	75 (72.8%)	103 (1000%)

カイ二乗値 0.793 有意確率 0.851

表 8 母親との会話時間の有無とかじとりのクロス表

			母親との休日会話時間		合計
			なし	あり	
かじとり 4 類型	融通なし	度数	0 (0.0%)	12 (100.0%)	12 (100.0%)
	きっちり	度数	7 (17.5%)	33 (82.5%)	40 (100.0%)
	柔軟	度数	6 (15.4%)	33 (84.6%)	39 (100.0%)
	てんやわんや	度数	2 (16.7%)	10 (83.3%)	12 (100.0%)
合計		度数	15 (14.6%)	88 (85.4%)	103 (100.0%)

カイ二乗値 2.387 有意確率 0.496

表 9 父親との会話時間の有無ときずなのクロス表
クロス表

			父親との休日会話時間		合計
			なし	あり	
きずな 4 類型	バラバラ	度数	3 (60.0%)	2 (40.0%)	5 (100.0%)
	サラリ	度数	17 (28.8%)	42 (71.2%)	59 (100.0%)
	ピッタリ	度数	9 (23.7%)	29 (76.3%)	38 (100.0%)
	ベッタリ	度数	0 (0.0%)	4 (100.0%)	4 (100.0%)
合計		度数	29 (27.4%)	77 (72.6%)	106 (100.0%)

カイ二乗値 4.508 有意確率 0.212

表 10 母親との会話時間の有無ときずなのクロス表
クロス表

			母親との休日会話時間		合計
			なし	あり	
きずな 4 類型	バラバラ	度数	1 (20.0%)	4 (80.0%)	5 (100.0%)
	サラリ	度数	9 (15.3%)	50 (84.7%)	59 (100.0%)
	ピッタリ	度数	6 (15.8%)	32 (84.2%)	38 (100.0%)
	ベッタリ	度数	0 (0.0%)	4 (100.0%)	4 (100.0%)
合計		度数	16 (15.1%)	90 (84.9%)	106 (100.0%)

カイ二乗値 0.821 有意確率 0.846

3.4 一元配置分析

(1)父親・母親とのコミュニケーションの有無と自己評価

「父親・母親とのコミュニケーションの有無」を独立変数とし、「自己評価」を従属変数として、それぞれ一元配置分析を行うとともに「父親・母親とのコミュニケーションの有無」と「自己評価」の関係を箱ひげ図で示す。

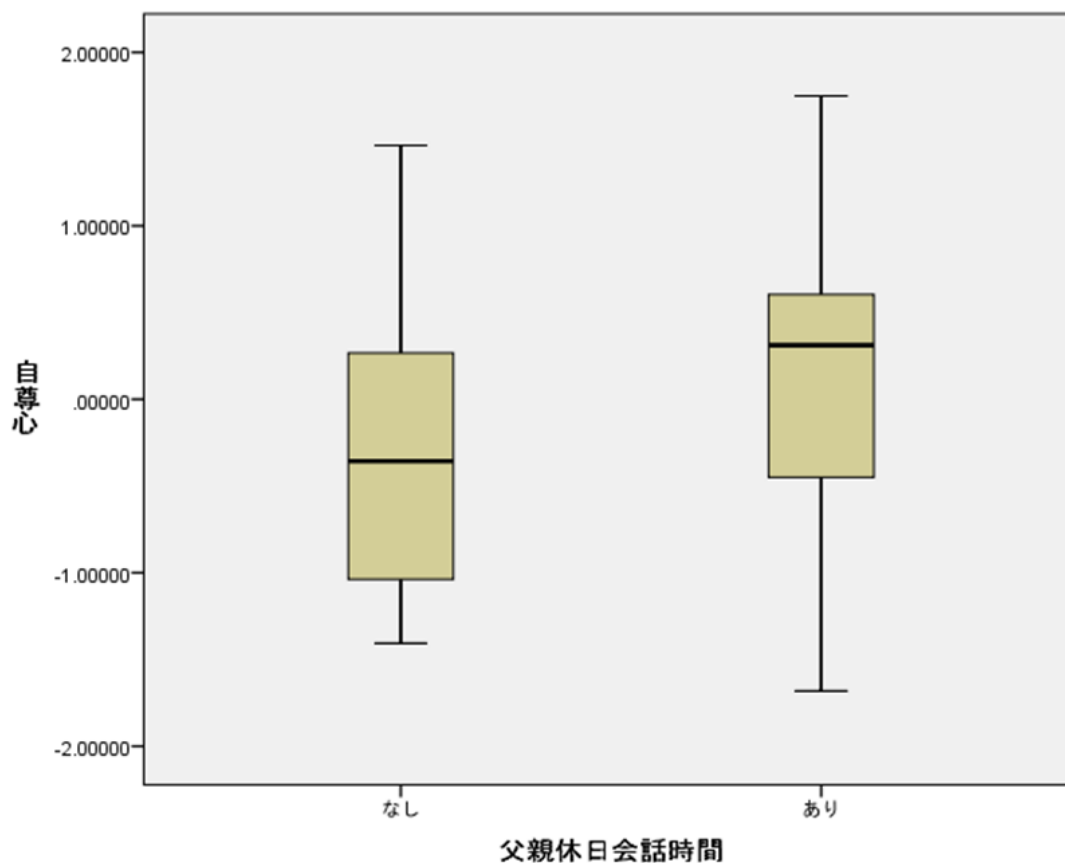


図 5 父親との会話時間の有無と自尊心の比較

表 11 自尊心に対する父親とのコミュニケーションの有無の分散分析結果

自尊心	なし	あり	F値	有意確率
平均値	-.305	.107	5.574	.020 *
SD	.803	.791		
N	28	80		

最初に「父親とのコミュニケーションの有無」を独立変数とした「自尊心」の平均値についての分散分析結果を図 5、表 11 に表す。Levene の等分散性の検定において、 $p > 0.05$ であったため、分散分析を行った。その結果、有意確率が $p < 0.05$ となり、「父親とのコミュニケーションの有無」と「自尊心」との間には差が見られた。

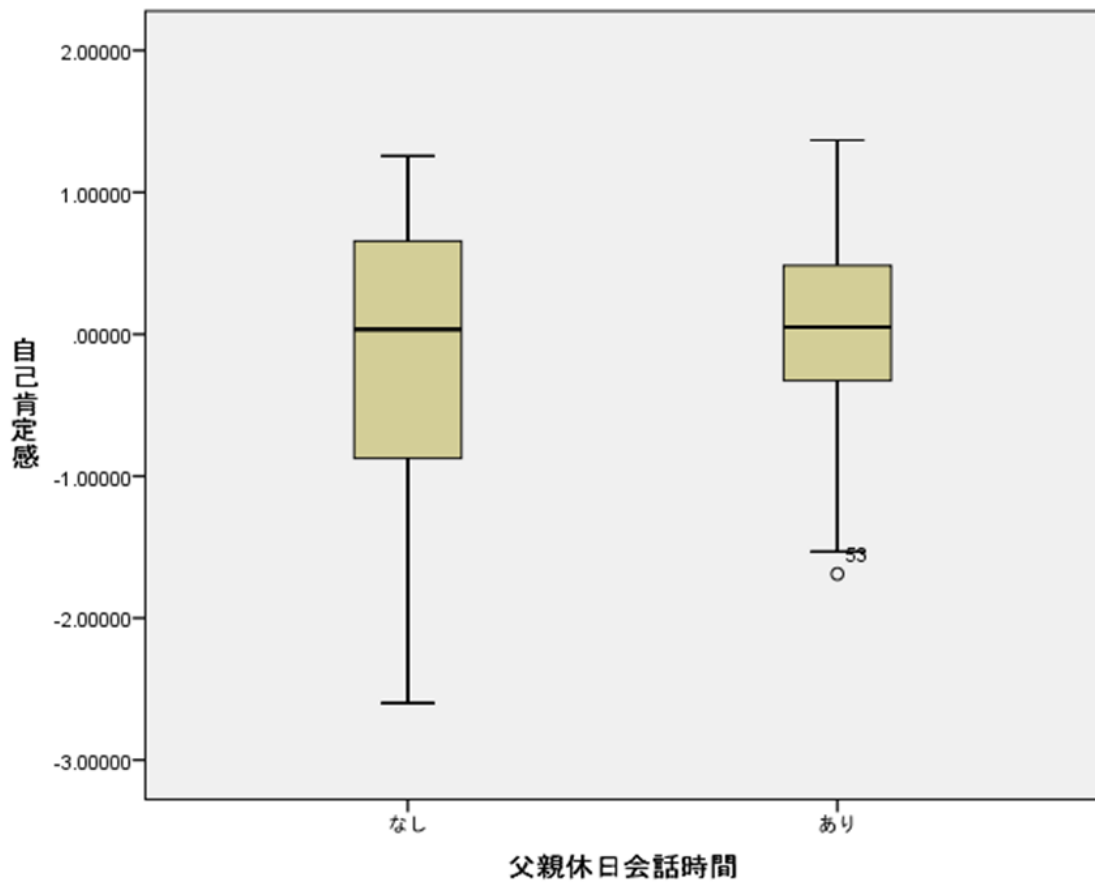


図 6 父親との会話時間の有無と自己肯定感の比較

表 12 自己肯定感に対する父親とのコミュニケーションの有無の分散分析結果

自尊心	なし	あり	F値	有意確率
平均値	-.305	.107	5.574	.020
SD	.803	.791		
N	28	80		

次に「父親とのコミュニケーションの有無」を独立変数とした「自己肯定感」の平均値についての分散分析結果を図 6、表 12 に表す。Levene の等分散性の検定において、有意確率 $p < 0.05$ であったため、平均値同等性の耐久検定を行った。その結果、有意確率が $p > 0.05$ となり、「父親とのコミュニケーションの有無」と「自己肯定感」との間には差が見られなかった。

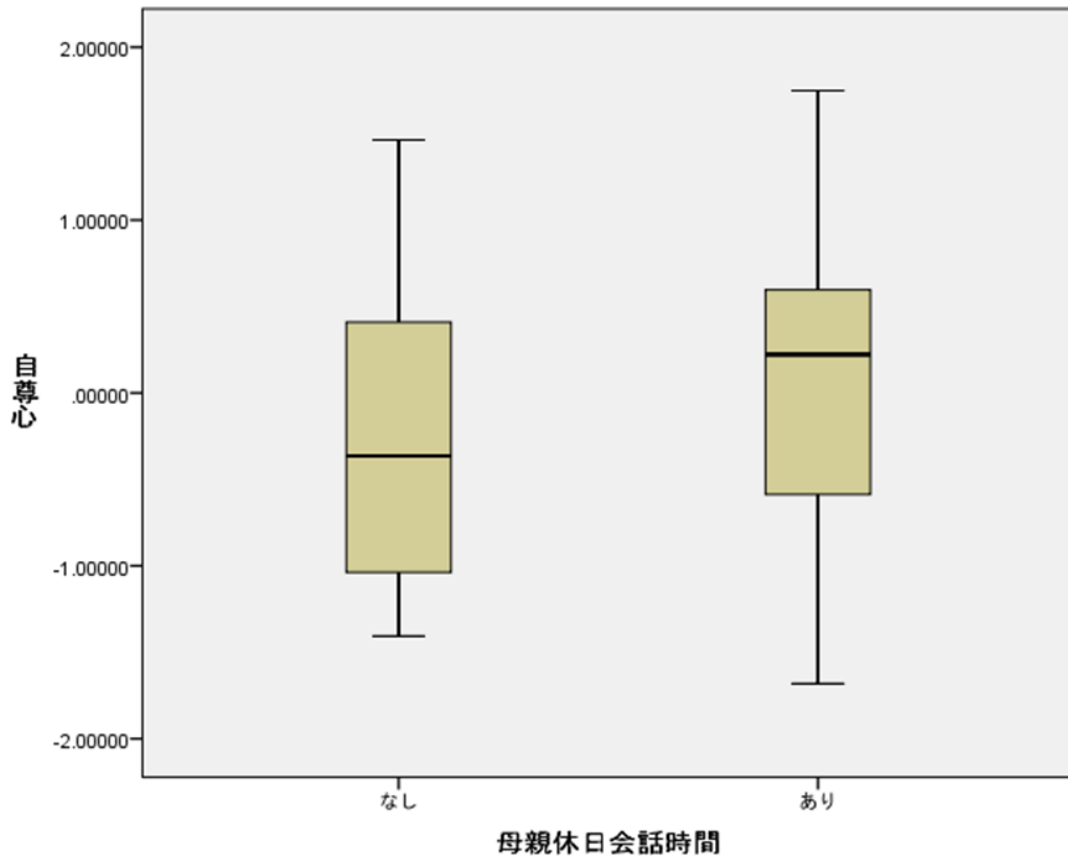


図 7 母親との会話時間の有無と自尊心の比較

表 13 自尊心に対する母親とのコミュニケーションの有無の分散分析結果

自尊心	なし	あり	F値	有意確率
平均値	-.268	.047	2.067	0.154
SD	.873	.795		
N	16	92		

次に「母親とのコミュニケーションの有無」を独立変数とした「自尊心」の平均値についての分散分析結果を図 7、表 13 に表す。Levene の等分散性の検定において、有意確率 $p > 0.05$ であったため、分散分析を行った。その結果、有意確率が $p > 0.05$ となり、「母親とのコミュニケーションの有無」と「自尊心」との間には差が見られなかった。

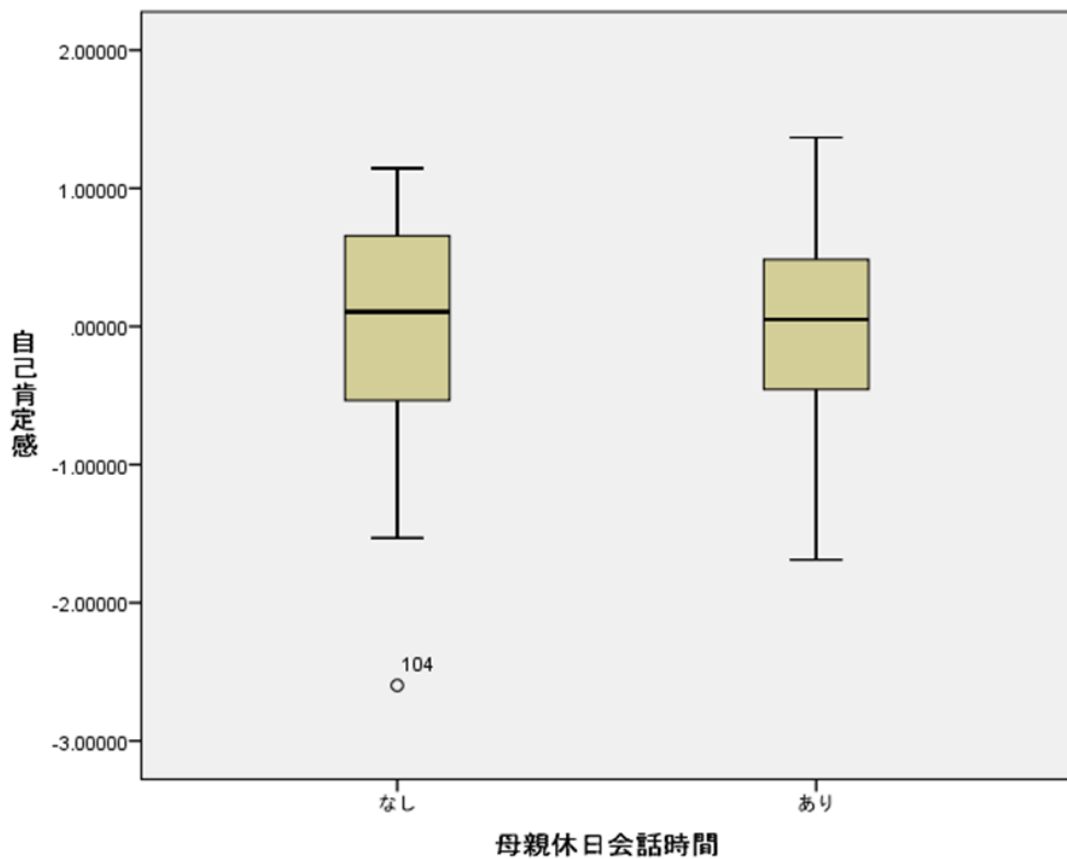


図 8 母親との会話時間の有無と自己肯定感の比較

表 14 自己肯定感に対する母親とのコミュニケーションの有無の分散分析結果

自己肯定感	なし	あり	F値	有意確率
平均値	-.065	.011	.123	.727
SD	1.035	.766		
N	16	92		

次に「母親とのコミュニケーションの有無」を独立変数とした「自己肯定感」の平均値についての分散分析結果を図 8、表 14 表す。Levene の等分散性の検定において、有意確率 $p > 0.05$ であったため、分散分析を行った。その結果、有意確率が $p > 0.05$ となり、「母親とのコミュニケーションの有無」と「自己肯定感」との間には差が見られなかった。

(2)きずな・かじとりと自己評価

本研究の1.4で立てた①の仮説について確認することができなかつたため、きずな・かじとりが子どもの自己評価に直接影響する可能性を考え、一元配置分析を行った。「きずな・かじとり」を独立変数とし、「自己評価」を従属変数として、それぞれ一元配置分析を行うとともに「きずな・かじとり」と「自己評価」の関係を箱ひげ図で示す。

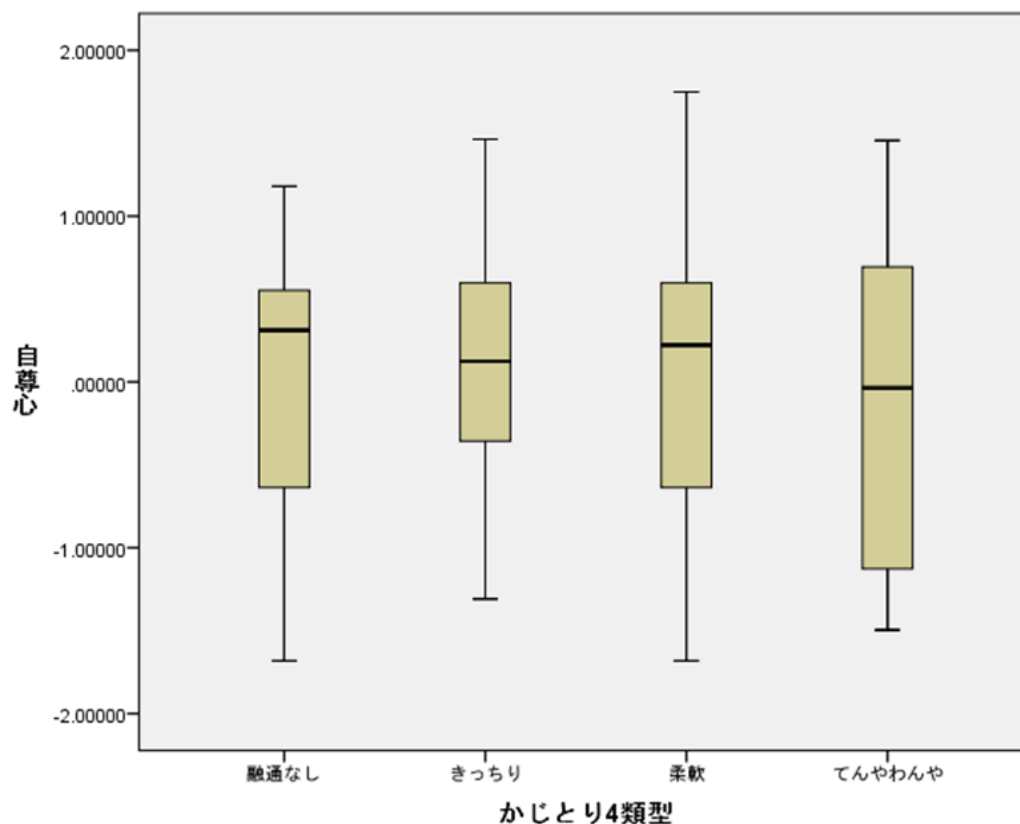


図9 かじとりの4類型と自尊心の比較

表15 自尊心に対するかじとりの4類型の分散分析結果

自尊心	融通なし	きっちり	柔軟	てんやわんや	F値	有意確率
平均値	.019	.103	-.034	-.089	.267	.849
SD	.871	.676	.849	1.036		
N	11	40	39	12		

最初に「かじとりの4類型」を独立変数とした「自尊心」の平均値についての分散分析結果を図9、表15表す。Leveneの等分散性の検定において、有意確率 $p > 0.05$ であったため、分散分析を行った。その結果、有意確率が $p > 0.05$ となり、「かじとりの4類型」と「自尊心」との間には差が見られなかった。

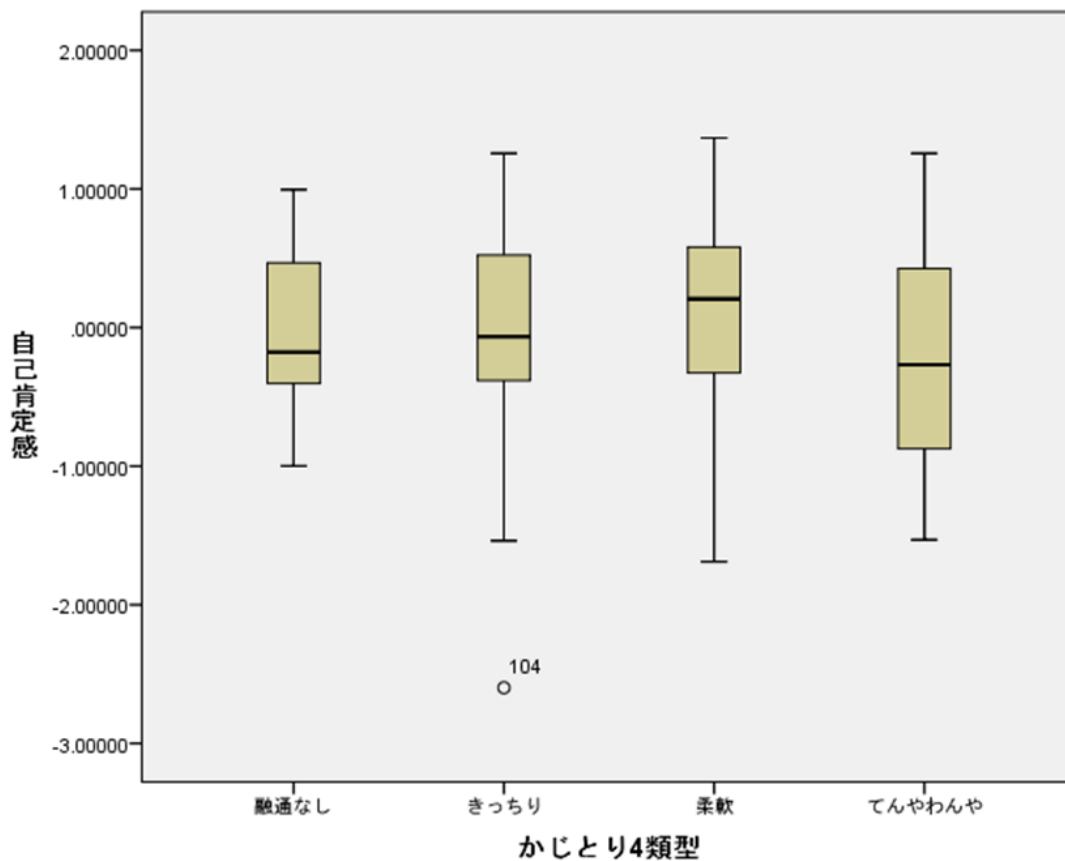


図 10 かじとりの 4 類型と自己肯定感の比較

表 16 自己肯定感に対するかじとりの 4 類型の分散分析結果

自己肯定感	融通なし	きっちり	柔軟	てんやわんや	F値	有意確率
平均値	-.038	-.018	.116	-.190	.502	.682
SD	.665	.828	.808	.836		
N	11	40	39	12		

次に「かじとりの 4 類型」を独立変数とした「自己肯定感」の平均値についての分散分析結果を図 10、表 16 表す。Levene の等分散性の検定において、有意確率 $p > 0.05$ であったため、分散分析を行った。その結果、有意確率が $p > 0.05$ となり、「かじとりの 4 類型」と「自己肯定感」との間には差が見られなかった。

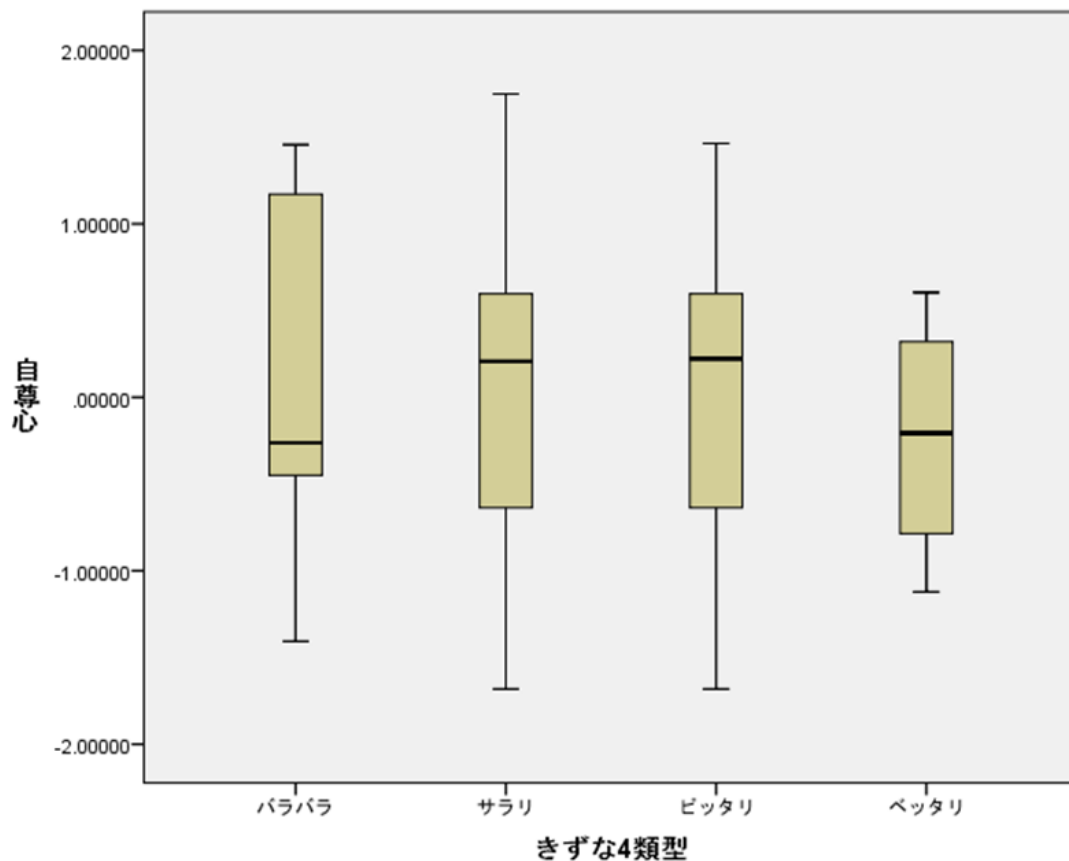


図 11 きずなの 4 類型と自尊心の比較

表 17 自尊心に対するきずなの 4 類型の分散分析結果

自尊心	バラバラ	サラリ	ピッタリ	ベッタリ	F値	有意確率
平均値	.101	.052	-.026	-.233	.216	.885
SD	1.193	.797	.782	.733		
N	5	59	37	4		

次に「きずなの 4 類型」を独立変数とした「自尊心」の平均値についての分散分析結果を図 9、表 15 表す。Levene の等分散性の検定において、有意確率 $p > 0.05$ であったため、分散分析を行った。その結果、有意確率が $p > 0.05$ となり、「きずなの 4 類型」と「自尊心」との間には差が見られなかった。

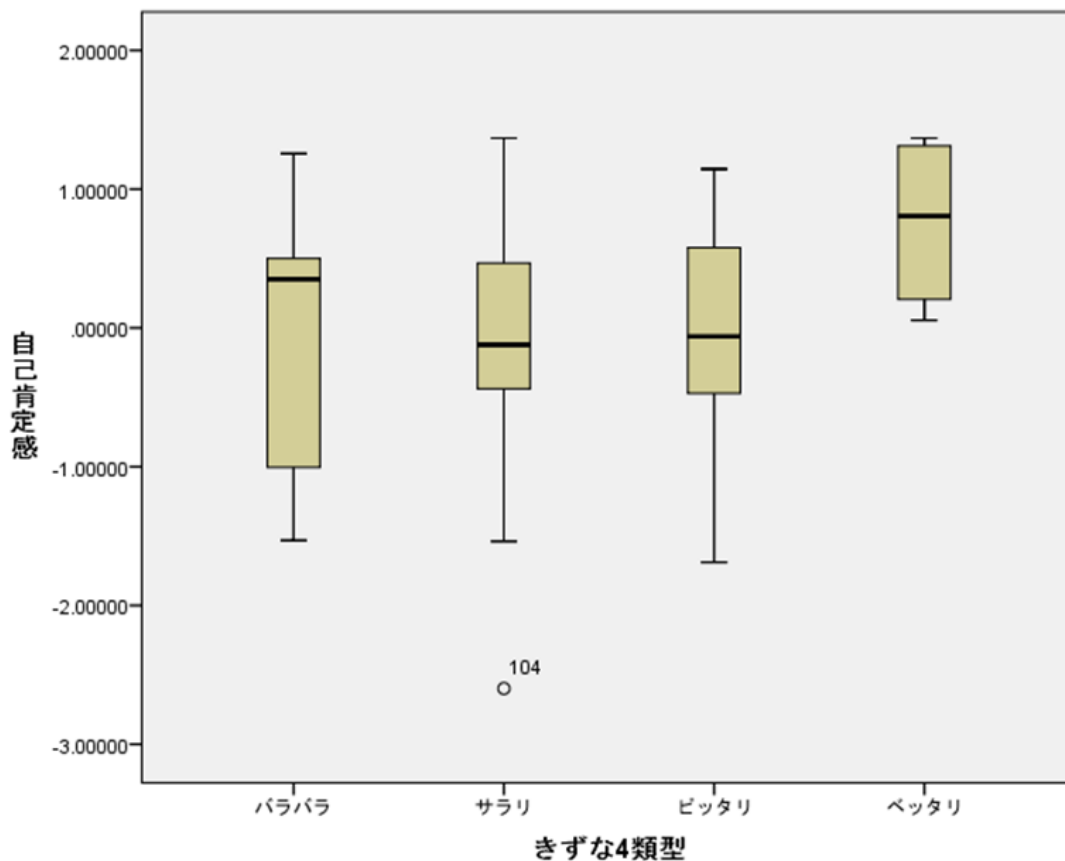


図 12 きずなの 4 類型と自己肯定感の比較

表 18 自己肯定感に対するきずなの 4 類型の分散分析結果

自己肯定感	バラバラ	サラリ	ピッタリ	ベッタリ	F値	有意確率
平均値	-.086	-.040	.011	.759	1.280	.285
SD	1.148	.810	.736	.652		
N	5	59	37	4		

最後に「きずなの 4 類型」を独立変数とした「自己肯定感」の平均値についての分散分析結果を図 9、表 15 表す。Levene の等分散性の検定において、有意確率 $p > 0.05$ であったため、分散分析を行った。その結果、有意確率が $p > 0.05$ となり、「きずなの 4 類型」と「自己肯定感」との間には差が見られなかった。

以上の結果から、「かじとり」と「自尊心」、「かじとり」と「自己肯定感」、「きずな」と「自尊心」「きずな」と「自己肯定感」すべてにおいて、有意な結果を得ることができなかった。

4 章 考察

4.1 記述統計に関する考察

まず、父親と母親との会話時間に関してであるが、母親との会話時間は父親との会話時間に比べ2倍近く長いという結果となった。要因としては、男性の子育て時間が母親に比べ短いことが考えられる。総務省統計局が2011年に行った調査によると、6歳未満児のいる世帯において、1日の女性の育児時間は3時間2分(家事全体では7時間41分)であるが、男性の育児時間は39分(家事全体では1時間7分)と母親に比べ大幅に少ない。これは2つの原因が考えられる。1つ目が労働時間の男女差が考えられる。総務省統計局が2011年に行った調査によると、一週間の労働時間が男性は53.13女性は43.71時間である。労働時間が長いため、必然的に家族との時間が減り、会話が少なくなるのではないかと。2つ目の理由として、男女の役割意識がある。男性は外で仕事し、女性は家で家事・子育てをするという性別役割意識が依然として根強く残っているのではないかと。

次にきずなにおいて、「たいがい各自好きなように過ごしているが、たまには家族一緒に過ごすこともある」「休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある」と回答した人が多く、一方で、「家族の間で、用事以外の関係は全くない」「誰かの帰りが遅いときには、その人が帰るまでみんな起きて待っている」と回答した人が少ないという結果になった。また、かじとりについては「家でのそれぞれの役割ははっきりしているが、皆でおぎないあうこともある」「問題が起こると家族はみんなで話し合い、決まったことはみんなの同意を得たことである」と回答した人が多かった。これは、ライフスタイルの多様化により、家族内でもそれぞれの生活スタイルがあるが、家族としてのつながりを全く無視しているわけではなく、バランスを取りながら生活し、家族内でのそれぞれの役割を相補的に行う「合意制家族」の浸透が進んでいるのではないかと。

交友関係において、「気の合わない人とも話をする事ができる」「何でも話せる友人がいる」に関しては肯定的な考えを持つ人が多いが、「友達付き合いが面倒の感じることもある」に関しては否定的な考えを持つ人が多い結果となった。これは、交友関係において積極的な態度を持ちつつ、時には友達付き合いが煩わしく感じ、交友関係に対して常に肯定的に考えていないといえるだろう。自己評価に関しては、「自分の親から愛されている(大切にされている)」と思う「自分には長所があると感じる」においては肯定的に評価する人が多かった。一方、「ときどき、自分は役に立たないと強く感じる事ができる」「私は自分自身に満足している」に関して否定的な評価をする人が多く、特に「ときどき、自分は役に立たないと強く感じる事ができる」に関しては80%以上となった。自己の長所を把握しつつ、それが具体的にどのようなことに役立つのかを認識しておらず、さらに自己をよくしたいという向上心をもつ人が多いといえるのではないかと。

4.2 分析の考察

最初に「きずな・かじとり」と「父親と母親とのコミュニケーションの有無」であるが、本研究においては有意な結果を得ることができなかった。これは、家族のきずな・かじとりの違いによって父親と母親とのコミュニケーションの有無に違いがあるとは言えないということの意味している。家族システムの計量的研究において、かじとりが中庸である家族は、

コミュニケーションによって家族の民主制が保たれているということがあったが、かじとりの中庸はコミュニケーションだけでなく、他の要素も関係しているのであろう。よって本研究においては、有意な結果を得ることができなかったのではないか。また、きずなにおいては、「コミュニケーションが多ければきずなの度合いが高い」といったように、コミュニケーションの有無で決まるのではなく、家族成員間の関係や、認識で変化することも考えられるため、有意な結果が出なかったことも考えられるのではないか。

次に「父親と母親とのコミュニケーションの有無」と「自己評価」についてだが、「自尊心」において、父親とのコミュニケーションがあれば高まるということが分かった。こちらはこれまでの研究のとおり結果であり、父親は子育てにおいて影響力があるといえるだろう。父親との会話があるということは、父と子ども間に会話可能な関係性があるということであろう。父親との会話の中で、子どもは欠点も含めた自分の価値を再認識できる。また、子どもにとって社会に出た経験のある父親と会話することは、社会について知ることができる。つまり、社会においてどのような長所をどのような場面において生かすことができると認識することに加え、短所も場合によっては長所となりうることを知るなど、社会において自分が役に立つ存在であることを認識したり、そのような存在になろうとする。このことから、父親との会話は、単なる意見や気持ちなどの交換ではなく、子ども自身が自分に対する価値を見出したり、否定的な評価も弱めるといえるだろう。母親とのコミュニケーション量に比べ、父親とのコミュニケーション量が少ないにもかかわらず、父親との会話の影響力が再確認されたことから、父親は子育てにおける影響力が強く、子どもにとって重要な存在ではないか。

一方で、「父親とのコミュニケーションの有無」と「自己肯定感」との間には有意差が見られなかった。これは、父親とのコミュニケーションによっては、自己肯定感を高めるとは言えないということを示している。子ども自身の自分への良い評価を高めるためには、子ども自身が実際に体験した出来事や社会とのかかわりなど、他の要素が必要となってくるのではないか。

また、「母親とのコミュニケーションの有無」と「自尊心」および「自己肯定感」についても、有意差は見られなかった。これは、母親とのコミュニケーションの有無は、子どもの自尊心および自己肯定感に関係があるとは言えないことを意味している。子どもにとって母親との会話は、自己評価を高めるものではないのかもしれない。しかし、母親とのコミュニケーション量は父親のそれに比べ2倍近くと、子どもにとっては必要なものなのであることに違いないであろう。たとえ母親との会話が、子どもの自尊心や自己肯定感を高めるものでないとしても、日々の会話の積み重ねが子どもの生活には欠かせない不可欠なものとなっているのではないだろうか。

最後に「きずな・かじとり」と「自己評価」について見ていく。「かじとり」と「自尊心」、「かじとり」と「自己肯定感」、「きずな」と「自尊心」、「きずな」と「自己肯定感」すべてにおいて、有意な結果を得ることができなかった。家族システムが状態であるかによって、子どもの自己評価が変化することを、本研究において明らかにすることはできなかった。きずな・かじとりが直接自己評価に影響するのではなく、なんらかの変数が媒介し、間接的に影響していることが考えられるであろう。

おわりに

以上見てきたように、きずな・かじとりは父親と母親とのコミュニケーションの有無に影響しないこと、自尊心は母親からではなく父親によって影響を受けること、自己肯定感には母親、父親のいずれにも影響を受けないこと、きずな・かじとりは自尊心および自己肯定感に影響しないことが言えるだろう。本研究では、これまでの研究で行われてきた、きずな・かじとりとコミュニケーションとの関連が見られなかった。家族内でのコミュニケーションについては、本研究で行った量的な調査だけでなく、会話の内容等の質的な調査をすることで有意義な結果を得ることができるのではないか。家族のあり方が多様化し、これまでの「家族」のイメージが崩れ、家族内での役割も家族によってさまざまである。家族を1つの尺度で測ることがさらに困難になっていく中で、家族システムをうまく機能させるためには、家族システムの計量はこれからも注目されるはずである。

また、子どもが男子であるか女子であるかによって、父親および母親から受ける影響が違ふという推測もある。そのため今後の課題としては、男女によって親から受ける影響の違いを研究することではないか。性別により異なる傾向を発見でき、より明確な傾向が見られるのではないかと考える。

さらに、一世帯あたりの人数の減少にともない、従来では家族の中で行われてきた子どもの教育やしつけが家族の外で行われたり、子どもの社会化が行われにくくなっている。家族のモデルというものがなくなり、子育てのやり方もさらに多様化していく中で、子どもの社会化や自己評価を高めるためには何が必要であるのかを研究することは、合意制家族として役割を交換あるいは補い合うように、どのような家族に生まれても「健康な」子ども育てることに役立つのではないだろうか。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、調査にご協力いただいた同志社大学の学生の方々、お忙しい中たくさんの助言・提言をくださった立木茂雄先生に心より感謝いたします。

[参考文献]

- D.B.リン, 1981『父親 その役割と子どもの発達』北大路出版.
- 濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘,2005,『社会学小辞典』有斐閣.
- 平石賢二,1990「青年期における自己意識の発達に関する研究(1)——自己肯定性次元と自己安定性次元の検討——」『名古屋大学教育学部紀要. 教育心理学科』第37号, 217- 234.
- 石川周子, 2004, 「第8章 父親の養育行動と子供のディストレス——<教育する父>の検証 本田由紀編『女性の就業と親子関係——母親たちの階層戦略』勁草書房, 133-147.
- 片岡佳美, 2015, 「現代日本社会における<家族らしさ>と合意制家族についての研究」.
- 久米功一・花岡知恵・水谷徳子・大竹文雄・奥山尚子,2014「パーソナリティ特性の形成要因—家庭・学校・職場の経験から」『行動経済学』第7巻:50-54.
- 森岡清美・望月崇, 2007, 『新しい家族社会学』培風館.
- 向田久美子,1998,「子どもの偏見に及ぼす親の影響について」『性格心理学研究』6(2):82-94.
- 中釜洋子・野末武義・布柴靖枝・無藤清子,2008, 『家族心理学——家族システムの発達と臨床的援助』有斐閣.
- 野々山久也, 2007, 『現代家族のパラダイム革新』東京大学出版会.
- 尾形和男,1995「父親の育児と幼児の社会生活能力」『教育心理学研究』,43, 335- 342.
- Persons, Bales, 1956, *FAMILY Socialization and Interaction Process.*(=1970, 橋爪貞雄訳『核家族と子どもの社会化<上>』黎明書房, 62-79).

[参考 URL]

- 内閣官房内閣広報室, 2015「女性が輝く日本へ」
(<http://www.kantei.go.jp/jp/headline/women2013.html#mo02>, 2016.1.30).
- NPO 法人ファザリング・ジャパン, 2015「父親の育児・家事」
(<http://fathering.jp/activities/fatherhood>, 2016.1.30).
- 厚生労働省, 2011「平成23年度版 働く女性の実情」
(<http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujou/dl/11gaiyou.pdf>, 2016.1.30).
- , 2015「国民生活基礎調査の概況」
(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/20-21-h25.pdf>, 2016.1.30).
- 総務省統計局, 2012「平成23年社会生活基本調査」
(<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/gaiyou2.pdf>,2016.12.8).
- ,2013「労働力調査ミニトピックス No.8」
(<http://www.stat.go.jp/data/roudou/tsushin/pdf/no08.pdf>, 2016.1.30).
- ,2013「世帯の構成」,『なるほど統計学園高等部』
(<http://www.stat.go.jp/koukou/cases/cat1/fact5.htm>,201612.7).
- 立木茂雄, 2016, 「家族システム評価尺度 FACESKG」(<http://www.tatsuki.org/>, 2016.7.2).
- 矢島修平・寺田盛紀, 2009「大学生の職業観形成における父親の影響」『生涯学習・キャリア教育研究』5号 (<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/handle/2237/16877>, 201612.1).
- 山本圭三, 2013「現代大学生における職業的価値観の様相—構造と規定要因の検討—」

『経営情報研究：摂南大学経営情報学部論集』21巻1号年
(<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009614627/>, 2016. 12. 1).